

『浮世親仁形氣』論

永井堂亀友の『大和風俗俳人氣質』（宝暦一三年）に、ふざという「読本」好きの妻が出ることはよく知られている。その中で彼女は言う、

此親父（傍点筆者）氣質とやらを「さつ読んでみました。死なれた在所の爺様の事を思ひ出し。此様に涙で本がききました。横町の正本屋がしかりはせまいかと。又是が苦になりまして（巻一の二）

と。ここでの「読本」とは、「小説」（ヨミカシ）『放屁論後編』追加）などというのと同義と考えてよいと思うが、注目したいのは、『浮世親仁形氣』（享保五年）（以下、書名は適宜略記する）が、当時右のような読まれ方をしていたということである。つまり、一は、それが貸本屋の手を通してふざのような差階層にまで親しまれていたこと。二は、この作品を読んで涙まで流すような読者がいたということだ。

一の貸本屋については、当面の問題ではないのでひとまず置く。問題は二である。『親仁形氣』を読んで涙する読者がいたというのだ。なるほど、ふざという女性に『傾城禁短氣』に悲酔いするような特異な性癖の持ち主であるし、彼女の「涙」は極めて個人的なものとして無視してよいのかも知れない。だが、一方では『親仁形氣』が単なる笑い話ではないということも事実なのだ。私たちは、「いつも同じ意匠」「水谷不倒氏」「新撰列伝体小説史（前篇）三八二頁」と言い切る爽快さに目が眩んで、その豊饒さを黙殺してはいないだろうか。以上の反省に立ち、『親仁形氣』の再評価を企図したのが本稿である。

篠原進

『親仁形氣』の再評価。こう書くと、おそらく次のような反論が返ってくるだろう。曰く、そんな必要はない。この作品は、其碩のものとしては珍しいほど高い評価を受けてきたではないかと。確かに、その通りである。代表的なものを示してみよう。

① 後人頗る之を重んじたりと見え、序文などにも、形氣物は親仁形氣より始まりぬとやうに記せるもの多し。（中略）滑稽諷刺を交え教訓の意味をも多少含めて人情の弱点を穿たんとせるに長所あり。而かも其の弱点に同情を表して書けるは、後の氣質物の作者に比して其碩の優れたる所以なり〔藤岡作太郎氏『近代小説史』二七五頁〕。

② 「浮世親仁形氣」は「子息」「娘」から、かれこれ二十年後の作、其碩の筆も円熟した時である。（中略）誇張も内場に、人情もしめやかに写されてゐる〔山口剛氏『浮世艸子集』（解題）九七頁〕。

③ 各話は親仁の類型的氣質を書いたもので（中略）「子息氣質」「娘氣質」を書いてから二十年を経た其碩の歿年の作だけに、いかにも老熟味があり、人情も滑稽も教訓も落ちつきを持ってゐて、氣質物中の秀作とすべきである〔吉田澄夫氏『日本文学大辞典』〕。

④ 「親仁形氣」が最もまとまりがよく、老人という従来浮世草子の主役となることにな

かった連中を描いて、誇張と滑稽のなかに世間のもてあまされ者の老人の悲哀を感じさせて、気質物の代表作といえる〔長谷川強氏「八文字屋本」』『日本文学全史 四』一二九頁〕。

いかにも、この種の研究書はあまり批判的には書かないという傾向がある。だが、『傾城禁短気』を「云ふに足らぬ軽浮な作品」(⑤の一九九頁)とし、「確乎とした人生観や思想もなかった」(同・一九七頁)と其蹟を貶した高須芳次郎氏でさえ、『親仁気質』については、こう書いているのである。

⑤ 『親仁気質』は一番優れたものだとしてある。それは比較的に素直な筆で老人気質の各方面を描いてゐるので、他の気質物よりも人間がよく活躍してゐるためである(『近世文学十二講』一九八頁)。

なるほど、『親仁形氣』の良さは定評があることは分った。だが問題は依然として多い。例えば、②も③も、それが享保二〇年に成立したという前提に立ち、「円熟」②とか「老熟」③とか評していることである。これは、奥附(広島大学文学部所蔵本)に明らかな如く、享保五年とするのが正しい(『日本文学大辞典』は、③の同頁に『親仁形氣』の奥附写真掲載している。それにも「享保五年」とある)。ただ、享保五年成立説をとる陣坂隆氏も②③と同じように、「『親仁形氣』に」もっとも円熟した姿」(『近世文学の展望』五四頁)を見ているといった例もあり、成立年代を訂正しても、褒詞はどうやら不変のようである。問題は、そのような褒詞の画一性にある。

因みに、右の評言から、重なる言葉拾うと、『滑稽』『人情』が各三、「教訓」「誇張」が各二、ということになる。もちろん、評言の類似は、別段悪いことではない。見巧者たちの評仙に割れないのは、むしろそれが正鵠を射ているということでもあるからである。しかし、空虚さは否めない。それは、『親仁形氣』に認めた右の如き特質が、其蹟のものとしては、という括弧つきの良さなのか、それとも、西鶴さえも凌ぐほどののか、といった文学史的な立体化を欠いているからだ。言わば「褒詞」にリアリティがないのである。いったい、其蹟は正

当に評価されて来たのだろうか。彼は従来どのように評価され、今後どう評価仕直すべきなのか。もう少し迂路をとる。

二

確かに、其蹟を評価するのは難しい。しかし、それは今にはじまったことではない。例えば、神沢杜口の『翁草』は、「南嶺は」其蹟が筆法に不劣、而も当世の気を呑み込めて書く故に、物によりては其蹟をも圧り(百六)と多田南嶺の優秀性を説いた後、「割註」を付け、左記の如く訂正している。

〔割註〕 前に云其蹟が事、これはまた南嶺に遙に優れり。其代に淨瑠璃は近松門左衛門、草紙は其蹟と、人丸、赤人の如く世に賞せり。門左衛門は草紙を不得、其蹟が書る

淨瑠璃は、淋しくて人形はたらかず、得失は素より有答の事なり。其蹟が書しけいせい禁短気、色三味線、曲さみせん、親父気質の類、自然とのどやかに麗しく、南嶺が文は利口にて心闇し、何事もたけ高からんこそ物の上手なれ(『翁草』百六)。

其蹟と南嶺とは、どちらが秀れているのか。似たようなやりとりが、『騷旅漫録』にも載る。つまり、盧橘が南嶺を賛し、「其蹟などが及ぶところにあらず」(『騷旅漫録』八八)と言うのに対し、馬琴は「割註」でこう反論しているのだ。南嶺は其蹟などが及ぶところにあらずといふ説は、うけがたし。今も南嶺作とせし草紙たまさか見ることあれど、中々其蹟が右にいつるものにあらず。

なぜ、このように評仙が分れるのか。それについては、先掲『翁草』の説明が要を得ている。つまり、「南嶺が文は利口にて心闇し」いのに対し、「其蹟の『親仁形氣』などは」自然とのどやかに麗しく(百六)、「世のわざの事、又は時の人情を、よく書こなして」(五五)いるからということになる。もちろん、其蹟が自分を「無才の僕」(『役者三蔵笠』京)と言っているのは、「いろは仮名より外を見ぬ」(『御前義経記』序)とか「文盲」(『風流今平家』凡例)とか自称していた西沢一風の鑒みに倣ったものとも考えられ、そのまま受け取ることは出来ない。ただ、

るを得ないところでもあった（先掲『燕石雑誌』）。

意識してそうしたのか、そのようにしか書けなかったのかということは別として、其儘の作品に或る種の〈軽さ〉があることは否定できない。中村幸彦氏は、『俳人気質』（先掲）の一節を引用しながら、八文字屋本の読書層についてこう考証している。

浄瑠璃、芝居で耳なれた人物を面白く活躍させて、文章はやさしく、筋は軽く、理は常識で、情は溫和、世のむづかしい問題など棄にたくともない、読んでたのしく、人前の話にも出せる八文字屋本は、尚その多くは律義な封建道徳の所有者達であった、享保以来新しくふえた民衆の読者によるこぼれたものと思ふ（『八文字屋本版本行方』『近世小説史の研究』一四六頁）。

これは、八文字屋本時代物と限定しての説明ではない。むしろ、『親仁形気』の人氣の秘密を分析するコンテキストから派生したものであって、そこに示された見解は、そのまま氏の『親仁形気』観であると見てよいであろう。つまり、平易な文章で、単純な筋、理屈っぽくなくて、面白く楽しいこと、言わば〈軽さ〉が人氣の秘密だといふのである。「輕薄短小」、つまり、外形的にも内容的にも、軽く、薄く、短かく、小さいことがベストセラーを生む秘訣であるということとは現代の編集者の間で常識となっている（『朝日ジャーナル』一九八二年一月五日号・一九頁）。その意味で、氏の分析は充分今日的な言となっていたし、正しい。

しかし、本当にそうか。もちろん、『親仁形気』に〈軽さ〉があることは認める。だが、〈軽さ〉だけで人氣が呼べるものであろうか。確かに、〈軽さ〉は読者をその文学空間へいざなうのには効果的だ。しかし、それだけで読者を共感させることは出来ない。作者と読者との文学的共有空間は作者の提示した主題（トピック）が主体的に受けとめ、それに賛意を表した時、はじめて形成されるのである。そして、その〈感動の空間〉は、「律義な封建道徳の所有者」を相手に、極めて常識的な理を説くといった小手先の技巧では保持し得ないということも自明なことだ。『親仁形気』の主題は何か。以下、考えてみよう。

三

二人の老人がいた。功成り名を遂げた今は、酒だけを唯一の楽しみとし、悠悠自適の生活を送っていた。不満のない人生であった。そして、これからの残り少ない余生も平穩に運ぶ筈である。彼らは、そう確信し、今日も川岸で酒宴に興じていた。

しかし、一つの出合いが、老後の設計を一変させることとなる。彼らの眼前に突如二艘の船が現われたのだ。それは実に、股脈を極め、華やかな光景であった。船には、それぞれ大臣が安座し、贅を尽くし、大勢の野郎や遊女が色を競っていたのである。

のみかけ、引きかけ、三味線四挺で踊り歌、水主までも顔の色入目にうつるひ、なほ照りて赤き頭を振って義太夫節をうなる（以下本文の引用は、日本古典文学全集『仮名草子集・浮世草子集』所収本に拠ることとする）。

落日の照射を全身に受けて、乱舞する船客の群れ。逆光線の形造る影（シルエット）絵の前で、親仁たちは、一種の文化的衝撃に襲われる。

④余所の乱酒につれて、手前の酒もいつもよりは染み、爛鍋で通ふ事もとけしなく、後は七厘取り寄せ、五升樽もおほかに傾く月の、須磨の山の端に、今少しと見しまでのみ遊びしが、ことばでは「どうもならぬこの風景、世の楽しみとはこれなるべし」といへども、真実心には、宵の舟遊びの、色まじりの酒ほどの、半分も身に染みておもしろくないにはきはまれり

彼らは、信じ込んでいたのだ。赫奕たる日輪も、いつかは落ちる。そして、夕暮れは静かに迎えるものであると。しかし、夕焼けがこれほど美しかったとは。こんな人生の楽しみ方があったとは。冷え切った身に酒が染みだした。今、正に落ちなんとする夕陽に、どうしても自分を譬えてしまう。考えはじめると、居ても立

ってもいられなくなるのである。燗鍋も、もどかしいので、七厘を手元に置き、熱燗をたて続けに呷る。だが、心の底に深く沈殿したおりは一向に消えない。いややはり自分たち以上の境涯が、ある筈はないし、あつてはならないのだ。こう口に出して自分自身に言いきかせてはみても、それが負け惜しみでしかないことは、言っている当人が百も承知なのである。意を決した老人の一人が言う、

⑧この身を頼みれば、今までの作り賢人の楽しみは、ひとへに氣違ひの沙汰なり。世間に金をほしがらば、宵に見いやうな榮耀をせうがためなるに、われら金銀事欠かぬ身にて、七賢人とそやされ、名聞にしばらくは、仔細な顔して、をかしからぬ無色の酒に暮れて、このまま死なぬ事人間に生れたるかひはなし。

と。わが意を得たりと、別の老人も応じる。

⑨今も知れぬは人の身、月雪花は假令の染しみ。歌をよみ詩を作りて、我人仔細らしい顔はすれど、根を押してから臍より三寸下の無分別にきはまる所、人間の榮花このほかになし。拙者は今直悟道いたした。明日からこの七賢仲間をのがれて、今より思ひ切つたる色遊びして、世を心のままに騒ぐべし。

意気投合した二人は、以後古女房を離縁し、地元新町の半太夫や蕪を揚げ詰めにして遊び抜く。そして、遂には息子たちにも見離され、千両を付けて逆勘当されるのである。

『親仁形氣』（巻三の三）にある話だ。其積はこれを以て何を言わんとしたのであるうか。「年寄りの冷水的行為を誠めてをる」（水谷不倒氏『新撰列伝小説史前編』三八二頁）のであろうか。それとも、「偏したる氣質の惹き起す悲喜劇」（曙峻康隆氏『江戸文学辞典』一四二頁）を書こうとしたのか。私はどちらも違うと思う。

こうした読みにくさの限り、従来の『親仁形氣』論から一歩も抜け出せないことは自明である。

其積の氣質物は「西鶴の作に起原を求めることが出来る」（山口剛氏『浮世紳子集』（解説）九五頁）という。ここにおいても、それは例外でない。既に、指摘の

ある如く〔滝田貞治氏『西鶴の書誌学的研究』・長谷川強氏『仮名草子集・浮世草子集』（頭注）〕、其積は『西鶴俗つれづれ』（巻二の二）にこの話の「想を借りている」（長谷川氏・前掲書・五一七頁）。少し、比較してみよう。それは、こういう話である。

難波の八軒屋に二人の樂坊主がいた。彼らは、「渡世の業」を手代に任せ、同じ心の友を加え「和朝の七賢組」と称して、「古文めきたる顔」をし、一四、五年を過ごしていた。そんな或る日、贅を尽くした船が通りかかる。そして、その中の一艘が、盃を落として行く。それを拾ったことがきっかけとなって、樂坊主たちは酒宴をはじめ（※）。酒が進み宴もたけなわとなった時、一筋の人魂が飛ぶ。これを見た伊丹法師がこう言う、「今もしれぬは人の身。分別する程わけもなし。明日はとうからく狂言つくしめん」と。以後、彼らは野郎遊びから、遊女狂いへと進み、遊び抜く。もちろん、一年に百貫目以上使っても揺らぐ身代ではなかったが、樂坊主の一人は外聞をはばかってか、「世がおもしろからず」と自殺。これを知ったもう一人の老人も、無二の友を失った寂しさから、七歳になる自分の子に言いかせて、無理心中するのである。

因みに、西鶴は、ここをこう締め括っている。「もとは色道の乱よりは。かくはなりぬ。人のうちの人形ひとかたの人さへこれは。増て愚なる人の憤いかりべきひとつぞ」と。

なるほど、両者の枠組みは酷似している。其積がこれに拠ったことは確かだ。しかし、微細にみると、違いが浮かび上ってくる。それをひとことと言うなら、西鶴が感覚で表現したものを、其積は論理で表現したということだ。例えば、老人が遊びをはじめめる契機。つまり、『俗つれづれ』の場合、野郎の盃を拾ったことがきっかけとなっている。そして、宴たけなわの時（其積がの波線部（※）に用いたのはこの描写）人魂によって無常を誘われ、遊びをはじめることとなるのである。

これに対し、『親仁形氣』は、下戸でありながら「竹林の七賢」を気取る老人に対し、「ちくちく儒者」が、「本場の七賢は酒好き」と煽動したことを、酒興の発端としている。そしてその最中、他人の榮耀榮華を見たことで、彼らは回心を迫られ、激しい葛藤の後、遊ぶのである。その結末は、『俗つれづれ』が、二人の老人を自殺させ、色道への戒めで結んでいるのに対し、『親仁形氣』の場合は、

親父が逆勘当されることとし、次のように書いて、笑いで締め括っている。

前代ためしなき浮気親父と、笑うたも昔々。

作品	項目	機	は	み	欲	酒	は	を	動	遊	色	結	結び
『俗つれん』(巻二の二)	『親仁形』(巻三の三)	偶然酒を拾ったこと。	ちくら儲者のたくらみ。	他人の榮耀を見て、今までの生き方を深く反省し、葛藤した結果として。	遊女狂いの末、自殺する。	遊女狂いの末、自殺する。	色道の戒め	笑い					

永代蔵「巻一の二」や、蜷川で手代の借金を少額立て替えたことから吝嗇心を出し、深みにはまった男(『西鶴雛留』巻三の三)などの姿とオーバラップするし、ある意味で「人心ほどはかり難いものはない」(中村幸彦氏「近世小説史の研究」九四頁)といった、西鶴の普遍的なテーマと繋がるものでもあった。なるほど、「好色悲劇物語」(宗政五十緒氏「西鶴の研究」一八一頁)と言われ、重苦しい結末を用意していた『俗つれん』(巻二の二)に比べ、『親仁氣質』は笑いに満ちておりいかにも軽く見える。西鶴が一行で済ますところを、其磔は一〇行も二〇行も使う。印象的、ムード的な西鶴に比べ、其磔は説明的であり、理詰めであって、これでもかこれでもかと押してくる。そのへんを塚本哲三氏は、こう書いている。

其磔の作品は西鶴に出でたるものなるべく、而して西鶴に見るが如き簡潔遊動の文致と奇警鋭敏なる觀察とは、彼の作品に於て多く之を認むを得ざれども、暢達軽妙なる文筆と、複雑斬新なる構想とに至りては、却て彼に優れる所渺なからざるを見る(『有明堂文庫』「八文字屋本五種」(緒言)。

再び問う。其磔は『俗つれん』をアレンジし、何を言わんとしたのであろうか。『俗つれん』の主題を笑いで薄め、パラフレイズしたに過ぎないのか。賢

小さな盃が、巨大な財産を脅かす。『俗つれん』(巻二の二)には、そんな「極小・極大」の

「見立て」があり、いかにも巧い。それはまた、遊女の文を拾ったことから没落した吝嗇男(『日本

人の精神を忘れ、外見模倣に走った老人たちの、え、せ、形式主義を嗤うのか。それともそこまで踏み込まず、ただ単に酒色を戒めただけなのだろうか。もちろん、そう読んでも、読めないことはない。だが、本当にそうなのであろうか。もし、そうだとしたら、老人は一切の煩惱を捨て、聖人づらしつつ、ひたすら死を待たねばならぬことになる。それこそ、あの『近代艶隠者』(貞享三)の主人公たちのように生きろというのだろうか。いかにも、『艶隠者』の哲学は素晴らしい。しかし、そこに人間の体臭はない。例えば、J・スウィフトは、『ガリヴァー旅行記』に於て、馬の支配する「フウイヌム」というユートピアを描いてみせた。しかし、誰もそのユートピアに住みたいとは思わない。なぜなら、そこには、嘘や不正などあらゆる種類の「悪」が無い代りに、生きていく上で何よりも大切な「熱」を欠いていたからである。「悪」をも厭わず、自覚的な生を生きること。そこにのみ、鮮烈で躍動的な「生」は存在する。その場合、年齢など一切関係はないのだ。こう考えると、親仁の述懐は、ひととき重みを増してくるのである。前掲の傍点部(四七頁)を追ってみよう。

彼らは自分自身に問い直す。何のために辛苦して、金を稼いできたのか。自分は稼ぐのに夢中なあまり、稼ぎ出した金をどう使ったらよいかを忘れてしまっていたのではないか。しかし、忘れていたものを、あの大尺の遊びっぷりが教えてくれた。そうだ。自分はあるような楽しみ方をしたいがゆえに、若い時からひたすら金を稼ぎ、貯えて来たのだ。今、それを思い知らされた。確かに、気付くのが遅すぎたし、もう余命幾許もない。だが、生きた金の使い途を知った今は、それを最大限使って遊び抜いてやる。むぎむぎと死んでたまるか、と(⑩)。

また言う。花鳥風月を愛で、自然を讚美して生きるといふのは、まあかしでしかない。どんなにかつめらしい顔をしていても、一皮むけば人間が本当に好きなものは色の道なのだ。もっと自分の本音や本能に忠実に生きようではないか。賢人の仮面など捨て、思い切った色遊びで老いの入り舞いを締め括ろうと(⑪)。

論理は明快である。ムードで遊女狂いをするのではない。極めて自覚的なのだ。これこそ正に「老人の反乱」ではないのか。そして、其磔は、その「反乱」に

論理を与え、左祖さえしてもいるのである。其碩は「序」にこう書いている。

若き人に恐しがられ、色ある身に憎まれて、せう事なきの談義参りに、をかしからぬ日をわたるは、年寄の心の取置き、鈍なるゆゑなり。形は變るとも、心さへ古めかしい持たずば、誰か親父とて毛虫のやうに、払ひのける人はあらじ

精神の柔軟性。頭を硬く持つてはいけないと言うのだ。『親仁形氣』に、親仁らしくない親仁、老人らしくない老人が描かれる理由は、そこにある。だが一方で彼は、そこに描かれた人々が、らしくないなどは微塵も思っていないのである。いかにも其碩は言う、「一変り変りたる、親父どもの氣質」(序)を書いた。しかし、そこに籠められた軸に氣付かなくてはいけない。彼は読者たちに言いたいのだ。「百人百様の老後の過ごし方があるべきだ」と。そして、「真に笑われるべきは、むしろ、らしくないという属性の鑄型に自分自身をはめ込んで、冒険心を忘れたことさら安心立命を得ようとしているような皆さん方ですよ」と。

笑う者が笑われる。人を異常と笑うのは、自分を正常と信じ込んでいるからである。しかし、その正常は、発想の軸をほんの少しずらすだけで、すぐさま異常に變ずるような脆い正常に過ぎないのである。

精神の硬直性を衝き、人に鮮烈で躍動的な「へ生」を勧めること、そこに軽い『親仁形氣』の重い主題があった。

四

リアリティとは何か。それは、どれだけ事実らしいかということではない。そこに掲げられた主題が如何に輝き、それに基づき人物がどれだけ生き生きと活動しているかということだ。

いみじくも、親仁は言った、「思ひ切ったる色遊びして、世を心のままに騒ぐべし」と。この言葉をどこかで聞いたことはなかったか。そうだ。あの世之介である。老いを自覚した晩年の彼は、次のように言い切って、女護の島へと旅立つ

て行った。

死だら鬼が喰ふまでと。俄にひるがへしても。有難き道には入難し。あさましき身の行末。是から何になりとも。成べし(巻八の五)

私は曾て、『好色一代男』に「心の劔を捨て」(巻四の三)とあるのに着目し、その後半が低調なのは、世之介が粹となることと引き換えに「心の劔」(暑)き生」を捨てたことに起因しており、世之介の旅立ちには、再び「心の劔」を得た彼が一生「心の劔」を持って生き続けることの宣言となっているのだと、『一代男』の構造を読んだことがある。『拙稿「ダンディズムと世之介」『弘前学院大学紀要』第一八号。暑き生「へ生」烈で躍動的な生』の追求、西鶴にとってそれは、生涯を通じての一貫したテーマであった。いかにも、老人の背後に世之介を想定することは、可能だ。山口剛氏は再び言う「経典として西鶴の作物を読んである彼(引用者注・其碩)は、西鶴の作意を探り得た」(前掲書・九五頁)と。まさしく、其碩は西鶴作品の背後に流れる主調音を明確に聴きとり、それをヒントとして新しい人物を造型していったのである。

その西鶴は、「人若時貯して、年寄ての施肝要也」(『日本永代蔵』巻三の二)といていた。金を溜めるだけ溜めて、「うき世を何の面白ひ事もなく果」(『同』巻三の四)てしまったのでは、何のために稼いだのか分らないのだ。これを受けて、其碩も主張する、「銀持ながら一生遊山嫌ひの有財銀鬼」(『子息氣質』巻三の三・目録)とか、「持つてをって齎有財銀鬼」(『渡世身持談義』巻一の二)と。金は使ってこそ意味がある。世之介は金を捨てることによって、「心の劔」を獲得した。老人たちは、自己の生の証しでもあるアイデンティティを金によって得ようとしたのである。

西鶴は、更に言う、「四十五迄に一生の家をかため、遊樂する事に極まれり」(『永代蔵』巻四の二)と。また言う、「四十より内にて世をかせぎ、五十から楽しみ」(『西鶴藏留』巻五の二)と。享保五年当時、五五歳の其碩(拙稿「『世間娘容氣』論」付載「江島其碩略年譜」参照)が西鶴の言葉に自分自身を重ね合わせなかったと

I <子息氣質剽窃表>

項目	『子息氣質』当該箇所	行数	被剽窃書	指摘者
序	(1)「梓にちりばめ〜助ならんかし」	1	1)『二十不孝』(序)	(滝)
卷の一	1)「常住香の物業〜始末に身をかため」	7	1)『永代蔵』(巻2の2)	(滝)
	2)「署かたし外へちらさず」	1	2)『永代蔵』(巻1の2)	(滝)
	3)「誂りをうけて〜難義にあはしぬ」	13	3)『永代蔵』(巻4の1)	(滝)
	4)「氏子は千金にもかへじ」	1	4)『二十不孝』(巻5の4)	(滝)
	5)「司馬温公の〜父のあやまち」	2	5)『一夜所』(巻5の4)	(滝)
	6)「左の手して箸をもてど〜語らせて」	7	6)『織留』(巻6の2)	(滝)
一の一	1)「ふたりの親は〜容儀もがなと」	2	1)『二十不孝』(巻1の4)	(滝)
一の三	1)「田吹色の真剣前ひ〜とよばれ」	2	1)『敗毒散』(巻3の2)	(長)
	2)「つきつぎの袋もたせて」	1	2)『二代男』(巻5の5)	
	3)「日まはし銀の〜魯陽が戈をうらやみ」	5	3)『敗毒散』(巻4の3)	
	4)「されば人間〜了簡してゆるしぬ」	6	4)『織留』(巻3の3)	
	5)「子かゆすり〜おやちおどろかれ」	2	5)『好色盛衰記』(巻2の3)	
二の一	1)「信世間を見るに〜日あり月あり」	23	1)『新可笑記』(巻2の4)	(滝)
	2)「人間の第一〜学文の外なし」	1	2)『織留』(巻3の2)	(滝)
	3)「医者所の色々々の人の文句」	1	3)『織留』(巻4の2)	(滝)
二の二	1)「むかしは〜有しか」	2	1)『新可笑記』(巻4の4)	(長)
	2)「智恵才覚には〜境をおひさせ」	6	2)『二十不孝』(巻1の4)	
	3)「一子を育てる苦勞話など」	3	3)『二十不孝』(巻4の3)	
	4)「町人の家業〜無常を親じ」	7	4)『織留』(巻1の1)	
	5)「朝水手向〜物前にも」	2	5)『二十不孝』(巻1の4)	
	6)「口横置につくって」	1	6)『名流の友』(巻5の6)	
	7)「光陰流水の如く〜速に暮て」	2	7)『敗毒散』(巻5の3)	
	8)「管絃場面の描写」	2	8)『御前義経記』(巻8の1)	
	9)「外門あらけなく〜つかひなり」	3	9)『五人女』(巻4の2)	
二の三	1)「六十余州の〜いふにやおよぶ」	7	1)『敗毒散』(巻4の3)	(滝)
	2)「惣じて人の〜かたはなかりき」	16	2)『二十不孝』(巻5の3)順不同	
	3)「たわけものは〜足じゃ足じゃ」	1	3)『俗つれづれ』(巻5の2)	
三の一	(1)「次第に分限に〜隠れなし」	10	1)『二十不孝』(巻4の2)	(滝)
三の二	1)「曾子は鈍魯〜益ならめ」	3	1)『敗毒散』(巻4の3)	
三の三	1)「大勢の子共の〜是をかし」	5	1)『胸算用』(巻5の2)	(滝)
	2)「親父ばかりは〜出る事もならず」	(5)	2)『織留』(巻3の3)前後	(滝)
	3)「七歳の時〜将をあげ」	2	3)『置土産』(巻3の2)	(長)
	4)「廬舎も目にかけ〜よみて買」	2	4)『二十不孝』(巻3の2)	(長)
四の一	1)「氷は水より出て〜知るべし」	2	1)『敗毒散』(巻2の1)	(滝)
	2)「手づからきせて〜業せんさくする」	5	2)『二代男』(巻1の4)	
四の二	1)「扶桑第一の大湊〜夢をならべ」	2	1)『永代蔵』(巻1の3)	(滝)
	2)「表蔵旭にうつりて〜煙たてける」	2	2)『二十不孝』(巻1の1)	(滝)
	3)「長脚のなかの〜すゑ〜材木」	1	3)『風無常』(上1の1)	(長)
	4)「三十余人の手代〜利徳を得」	3	4)『永代蔵』(巻3の1)	(滝)
	5)「大きなる蜘蛛〜たのしみふかし」	(5)	5)『永代蔵』(巻4の2)	(滝)
	6)「ひとつとも〜此作徳」	3	6)『織留』(巻3の3)	(滝)
	7)「一筆かくを〜氣を尽し」	1	7)『新可笑記』(巻1の5)	(長)
	8)「古物を持ち乞食」	1	8)『智恵鑑』(2の20)	
四の三	①<ほぼ全文>	77	1)『懷硯』(巻2の1)	(滝)
五の一	①「座摩の前の梳箱」	1	①『好色盛衰記』(巻4の1)	
五の二	①<ほぼ全文>	63	①『敗毒散』(巻4の1)	(河)
五の三	①「富貴にして苦あり〜おほし」	2	①『二十不孝』(巻2の1)	(滝)
	②「近年孔子頭に〜月影者といはれて」	5	②『二十不孝』(巻4の4)	
	③「短金長木の〜卦体〜(この古法)」	4	③『一夜所』(巻5の5)	
	④「十禅寺の日雇〜手まはしよく」	9	④『敗毒散』(巻1の1)	
計	序および本文 1,239行	333	無印は(篠原)	

(拙稿『世間子息氣質論』に掲載したものを補正した)

<凡例>

○剽窃の規準は「原文で二行以上に亘る類似」を基本としたが、それ以下のものや、内容の類似しているものなど、私的判断で掲げたものもある。

○略号で示した先学の指摘は、それぞれ下記の御論考にある。

- (1) (滝)⇒流田貞治氏『西鶴の書誌学的研究』(野田書房)
- (2) (長)⇒長谷川強氏『浮世草子の研究』(桜楓社)
- (3) (田)⇒田中 伸氏『氣質物の方法と限界』(『近世文芸』・第一号)
- (4) (河)⇒河盛好蔵氏『夜食時分のことなど』(岩波大系本・月報)

言い切ることは出来ない。遊楽の秋を迎えた親仁、それこそ、其積自身だったのでもある。

尊敬する西鶴は、五二歳でも多いと言って死んだ(『置土産』付載の辭世)。自分も残り少ない余生だ、遊楽三昧で過ごしたい。彼がそう考えたとしても無理はない。しかし、若い時の放蕩の報いか、実生活は、それどころではなかったのである。正徳四(一七一四)年、四代続いた大仏餅屋の家督を捨てた其破は、八文字屋に對してぎりぎりの戦いを挑む。それは、前年に自笑が雇った「新作者」(未練)

〔拙稿「未練と八文字屋」『弘前学院大学紀要』第二十七号・参照〕に対する先輩作者とし

ての面子と、本来なら五代目を継ぐべき物領市郎左衛門を出版業というやぐざな商売に引きずり込んでしまった、不甲斐ない家父長の責任と意地とを賭けた戦いでもあった(拙稿「抗争期の其破」『近世文芸』三四号・参照)。

紙師の高い時代である。紙師の高騰で倒産した書肆もあったという。倒産寸前の江嶋屋にとって、もう失敗は許されなかった。其破は西鶴の遺作を装った軽いもの『丹波太郎物語』を出した後、翌正徳五年には、氣質物の実質的第一作の『世間子息氣質』を出す(拙稿『世間子息氣質論』『弘前学院大学紀要』一五号・参照)。周知の如く、これがヒットシリーズとなったのである。ただ、それでも起死回生と

Ⅱ 〈娘容気剽窃表〉

項目 巻名	『娘容気』当該箇所	行数	被剽窃書	指摘者
巻一の一	1) 「往古は〜男さへかんにんせば」	8	1) 『一代女』	(3-4) (滝)
	2) 「かつはかきの小月〜半粒を入れて」	2	2) 『二代男』	(1-5) (録)
	3) 「右の手〜食端に」	1	3) 『穢留』	(5-2) (録)
	4) 「母親の鼻のさきわあ」	2	4) 『一代女』	(4-1) (滝)
	5) 「十三をかしらに〜年子に」	2	5) 『五人女』	(3-1) (滝)
	6) 「古代は縁付の〜あらはなり」	6	6) 『一代女』	(1-1) (滝)
	7) 「かりそめに〜物ぞかし」	7	7) 『五人女』	(2-1) (滝)
一の一	1) 「朝顔の盛は〜これにかぎらず」	12	1) 『五人女』	(2-3) (滝)
	2) 「安に町人ながら能い衆」	3	2) 『二代男』	(4-4) (滝)
	3) 「夏の夜は〜とりよせ」	3	3) 『二代男』	(6-1) (滝)
	4) 「八人品の火焼〜くらしにて」	7	4) 『好色盛衰記』	(4-1) (滝)
	5) 「たいこ持〜降雨はないか」	6	5) 『二代男』	(1-4) (滝)
一の一	1) 「招跡のうつふせ〜小船の庭」	2	1) 『文反古』	(2-3) (滝)
	2) 「同じ油火も〜趣味増えも酒座」	3	2) 『男色大鑑』	(1-3) (録)
二の一	1) 「上野桜咲て〜人心なり」	3	1) 『五人女』	(1-3) (滝)
	2) 「善物屋平四郎花見」	2	2) 『五人女』	(3-1) (滝)
	3) 「くわはが先祖三幅」	3	3) 『阿鼻用』	(1-2) (滝)
	4) 「自身物をめぬは〜女〜はづかしひ」	1	4) 『一代女』	(6-2) (録)
	5) 「車の沙汰〜城取」	1	5) 『武家義理』	(1-2) (滝)
二の一	1) 「今の世の風流〜花遊を好み」	2	1) 『永代蔵』	(1-5) (録)
	2) 「世を張って〜大東物をさくめかし」	10	2) 『婉久一世』	(下-1) (滝)
	3) 「しほふのかはり〜台天目にてはこぼせ」	4	3) 『穢留』	(1-3) (録)
二の一	1) 「奥座敷〜着替させ」	3	1) 『二代男』	(4-2) (滝)
三の一	1) 「大坂〜女談合」	4	1) 『一代女』	(4-1) (録)
	2) 「そちは誰かゆるして〜かてんがゆかぬ」	3	2) 『二代男』	(1-5) (滝)
三の一	1) 「むかしの形かはり〜いづしくなる物か」	4	1) 『穢留』	(6-1) (滝)
三の一	1) 「気付も縁も叶はす〜夫婦分にて」	31	1) 『俗つれづれ』	(2-3) (滝)
四の一	1) 「法花宗てはなきよし〜信心うすく」	8	1) 『懷観』	(4-4) (録)
四の一	1) 「泉州堺は〜時代もふけの分限」	3	1) 『好色盛衰記』	(4-1) (滝)
	2) 「舞船はひとへに〜危吉のこはね」	2	2) 『男色大鑑』	(2-2) (録)
	3) 「おるい思ひつき〜言葉にけれ」	5	3) 『五人女』	(1-2) (録)
	4) 「朋をすべて〜吉柳を好み」	8	4) 『武道伝来記』	(2-1) (滝)
四の一	1) 「浮世のならひ〜真綿ひくこそあれ」	11	1) 『二代男』	(4-2) (滝)
	2) 「膝にすりよ〜ふとん打きせ」	2	2) 『婉久一世』	(1-2) (滝)
	3) 「一切の女〜油火ともすもかまはず」	7	3) 『五人女』	(2-4) (滝)
	1) 「代官男を建て〜離縁される行為」	1	4) 『穢留』	(2-2) (滝)
五の一	1) 「去るものは〜女は稀なり」	16	1) 『五人女』	(5-3) (滝)
五の一	1) 「様や桶や〜七月十三日」	1	1) 『二十不孝』	(5-1) (滝)
	1) 「同・ストーリーの借用」			(田)
六の一	1) 「千早振神代には〜まじてや」	6	1) 『好色敗毒散』	(2-3) (録)
	2) 「大はたばこ切〜友川のきれいに」	6	2) 『武家義理』	(4-1) (滝)
六の一	1) 「余良坂や〜勘直してやうやう」	12	1) 『二十不孝』	(5-4) (滝)
	2) 「直なる世をわたり〜て悦を重むける」	4	2) 『二十不孝』	(同) (滝)
計	本文・及び序 1,573行	214		

まではいかなかった。金策が尽きたのであろうか、そこに予告した続編の『娘容気』は、遅延を余儀なくされる。だが、何とか谷村清兵衛の協力を取りつけ、『娘容気』は享保二(一七二七)年に出る『拙稿』『世間娘容気』論(一六号)。其稿はその見返しに、次の四冊を予告する(長谷川強氏『浮世草子の研究』に紹介有)。

(1)『浮世親仁形氣』(六巻)／(2)『天性大名気質』(五巻)／(3)『好色琉球芋』(五巻)／(4)『風流色めど木』(三巻)

まず「九月下旬出来」と予告した(2)が、翌享保三年に『和漢遊女容気』とし、谷村から出る『拙稿』変形運動としての八仕掛け――『和漢遊女容気』の手法――

江嶋屋での出版活動に限界を感じていた其稿にとって、八文字屋との接近は、乗れない話ではなかった。しかし、一方では従来のしりや意地もある。和解に向けての動きと、其稿のジレンマ、それが谷村と約束した『遊女容気』の延引と、出版に際しての無署名とをもちたものではなかったろうか。

ともかく、享保三年中に八文字屋との和解は成立し、とりあえず役者評判記から相版をはじめることとなる。しかし、先掲の広告で「近々」といつていた『親仁形氣』は、まだ出なかった。ただ、企画は谷村から八文字屋へと引き継がれていく。つまり、その「序」に和解の言葉を載せた『役者金化粧』(享保四年正月)(京の巻開口前)に、次のような広告を出すのである。

『日本文学』昭和五十七年七月・参照(なお(3)(4)について、今はふれない)。ところで、『子息気質』以後、『国姓爺明朝太平記』・『娘容気』と、自作への署名を心掛けて来た其稿であるが、この書に彼の署名はない。しかし、前掲の拙稿で考察した如く、これが彼の手になることは明らかである。なぜ彼は、『遊女容気』に署名をしなかったのであろうか。注目したいのは、この年と翌享保四年は、江嶋屋から一冊の浮世草子も出ていないということである。『遊女容気』も管見の限りでは、谷村の単独版となっている。そこで考えられるのは、『娘容気』の出た享保二年八月以降、八文字屋との間に和解に向けて何らかの接触があったのではないかとことだ。なぜなら「其稿一作の書は、世間にもてはやさず、唯八文字屋本をのみ諸人めで翫びぬ」(京撰戯作者考「江嶋其稿」といわれるような当時の出版界の状況である。作品に自信はあっても販売力の差は如何とも仕難い。

Ⅲ 『親 仁 形 気』

<長>は長谷川強氏『仮名草子集・浮世草子集』(頭注)。<簡>はⅠ・Ⅱに同じ。

世間子息気質追加
浮世親仁形気
右の本末月中旬二本出し申候
全部五巻

項目 巻名	該当部分 ①はっきり判明の分る文章 () 語句の関連 内容の関連	書 名	指 摘 者	構想関連
巻一の一	<1>「藤巻柄の人物勝差」 ※「肩問尺」「東山の椿吉能」など『子息気質』(2-3)や (1-1)と共通する語が多い。	<1>『永代蔵』(巻5の3)	録	
巻一の二	<1>「昔は相撲に四十八手〜およそ八十八手」 ・②「そんな年寄男〜書置させまして」 ・③「若い女と物をいへば力が落ちる」 ・④「あたらゑ二人〜修行募りて」	※<1>『子息気質』(巻2の3) 2『一代女』(巻4の4) ※<3>『子息気質』(巻2の3) 4『二十不孝』(巻5の3)	篠長 篠長 篠長 篠長	『二十不孝』 (巻5の3) ※『子息気質』 (巻2の3)
巻一の三	(1)「身過ぎほど悲しきものはなし」 (2)「楊枝・耳かきの突き付け売り」 <3>「言を巧に〜仁鮮し」 <4>「笛吹き吉太郎」	(1)『五人女』(巻3の2) (2)「俗つれづれ」(巻2の1) ※<3>『子息気質』(巻2の3) <4>『置土産』(巻1の1)	篠長 篠長 篠長 篠長	
巻二の一	・①「清水の西門〜それぞれの家職」 ・②「松永貞徳〜笑ふまじ」 ・③「干柿の抜け目のない男」 ・④「捨てる座屋〜銭をつなぎため」 ・⑤「常仕者の物業〜鼠の荒るをこまはず」 <6>「二葉講」 (7)「念仏講〜鬼の目をもくじり」 (8)「林持ちながら〜返答」	(1)『二十不孝』(巻1の1) 2『名残の友』(巻1の3) (3)『永代蔵』(巻2の5) 4『一代男』(巻8の3) 5『永代蔵』(巻2の2) ※<6>『子息気質』(巻2の3) 7『胸算用』(巻4の2) 8『誠留』(巻1の2)	長 篠長 篠長 篠長 篠長 篠長 篠長 篠長	<長> 『誠留』 (巻1の2) ※『子息気質』 (巻3の2)
巻二の二	(1)「ただ見る辻放下〜やらす」 <2>「福島の雀ずし見るやう」 <3>「吉梅好む〜嘔吐」 (4)「二十四五ばかりな荒兎の女房をお肝煎」	(1)『万の文反古』(巻4の2) ※<2>『和漢遊女』(巻4の1) ※<3>『娘答気』(巻4の2) 4『置土産』(巻3の2)	篠長 篠長 篠長 篠長	『置土産』 (巻3の2)
巻二の三	・①「その一心〜観念を」	1『新可笑記』(巻4の4)	長	※『子息気質』 (巻2の2)
巻三の一	・①「難波津や〜品とはなりぬ」 (2)「年もはや家に杖突きの」	1『一代女』(巻3の3) 2『永代蔵』(巻6の2)	長 篠長	『誠留』 (巻6の2)
巻三の二	・①「黒星の環は〜衆人あり」 (2)「勤王と内通に〜世知なく」 (3)「男は細綿の〜儲かなる世帯」(適宜利用) (4)「毎時が義経らの時話」 (5)「提おのづからいし〜腰を抜きし」 (6)「〜しゃらくさい事」	1『好色盛衰記』(巻4の1) 2『二十不孝』(巻3の2) 3『永代蔵』(巻4の5) 4『諸般はなし』(巻1の6) 5『名残の友』(巻3の3) 6『名残』(巻3の3)	長 長 長 長 長 長	<簡> 『名残友』 (巻3の3)
巻三の三	・①「何事もその人〜まねてならぬ事ぞかし」 (2)「見ぬ唐土の親父ども〜(以下の構想)」 (3)「思ひ切ったる〜縁ぐべし」 (4)「とかく姉妹は〜苦の始めぞかし」 (5)「今までは〜寂しがりせける」	1『名残の友』(巻3の4) 2「俗つれづれ」(巻2の2) 3『好色盛衰記』(巻3の2) 4『名残』(巻3の3) 5『名残』(巻3の3)	篠長 篠長 篠長 篠長 篠長	<簡> 『俗つれづれ』 (巻2の2)
巻四の一	・①「人間限りある一命〜運びても」 (2)「諸司の大名衆〜楽しみける」 (3)「ない物負はう」	①『誠留』(巻5の1) ②『胸算用』(巻2の1) ③『名残』(巻1の3)	篠長 篠長 篠長	
巻四の二	・①「娘が美人であり、嫁にとの申し込の多いこと」 (2)「当流の投げ島田」 (3)「女はかみかしら」 (4)「腰に締入れず〜三つ重ねの衣裳」	①『二十不孝』(巻1の3) ②『五人女』(巻3の1) ③『一代女』(巻3の4) ④『一代女』(巻1の4)	長 篠長 篠長 篠長	<長> 『二十不孝』 (巻1の3)
巻四の三	・①「親仁が掛取りに行き女の仕掛けにはまる」 ※付気質の主人公は『子息』(巻1の2)や『娘』(巻2の1)に有	①『一代女』(巻4の2)	長	
巻五の一	・※<1>「自称別他」	※『同姓姉妹明太平記』 (巻4の2)	篠長	
巻五の二	・※「浄土と法華の争い」『子息』(巻4の2)などに有		篠長	
巻五の三	・①「今に妻女の事〜(以下の構想)」 ※ 無器最娘の出世は『娘答気』(巻3の2)などにも有	①『伝来記』(巻1の2)	篠長	<簡> 『伝来記』 (巻1の2)

※①は他の世間作品と関連を持つもの

くための八百長であることは疑いない。つまり、享保四年の一年間は、江嶋屋と付き合いのあった書肆と、其破が残務整理をするための期間と自笑も黙認してい

「六巻」の分量が、「五巻」となり、刊行時期も「享保四年二月中旬」とまで詰められた。だが、それも結局、一年遅れることとなる。なぜ、一年も遅れたのか。もちろん、執筆に時間がかかったということもあるだろう。でも、一方で彼は、その年および翌年にかけて、谷村や菊屋など他書肆から本を出しているのだ。つまり、『武道近江八景』(享保四年)・『義経倭軍談』(同)・『花実義経記』(五年)の三作である。この件について、自笑から「互の作は外へ出すまいと、相仕の契約」をしたのに約束が違うではないかと抗議を受けた其破は「あれは前々書捨の反古」(役者三蓋笠 京の巻)だと言って逃げていた。もちろん、この喧嘩が両書肆相版の誌上でなされたことを考えれば、「(あの本は其破作とまぎらはしう見せた物じゃ。自笑と一所二名書のないは、愚作と必思ふてたもるな)」という言葉を導

Ⅶ<同>

順位	作品名	回数
(1)	『一代女』	5
(1)	『日本永代蔵』	5
(3)	『二十不孝』	4
(3)	『好色盛衰記』	4
(3)	『名残の友』	4
(6)	『胸算用』	3
(7)	『五人女』	2
(7)	『置土産』	2
(7)	『織留』	2
(7)	『俗つれづれ』	2
(10)	『二代男』	1
(10)	『諸国はなし』	1
(10)	『武道伝来記』	1
(10)	『新可笑記』	1
(10)	『万の文反古』	1
計		38

Ⅶ<浮世親仁形氣>
◎のみ

順位	作品名	回数
(1)	『一代女』	4
(1)	『二十不孝』	4
(3)	『名残の友』	3
(4)	『日本永代蔵』	2
(4)	『好色盛衰記』	2
(6)	『二代男』	1
(6)	『武道伝来記』	1
(6)	『新可笑記』	1
(6)	『胸算用』	1
(6)	『織留』	1
(6)	『俗つれづれ』	1
計		21

Ⅵ<和漢遊女容氣>

順位	作品名	回数
(1)	〈国性爺〉	10
(2)	『三所世帯』	7
(3)	『一代男』	6
(4)	『永代蔵』	5
(5)	『好色盛衰記』	3
(6)	〈好色敗毒散〉	2
(7)	『好色二代男』	1
(7)	『好色一代女』	1
(7)	『婉久一世』	1
(7)	『世間胸算用』	1
計		38

Ⅴ<娘容氣>

順位	作品名	回数
(1)	『五人女』	8
(2)	『二代男』	7
(3)	『一代女』	5
(4)	『織留』	4
(5)	『二十不孝』	3
(6)	『婉久一世』	2
(6)	『武家義理』	2
(6)	『好色盛衰記』	2
(6)	『男色大鑑』	2
(10)	『永代蔵』	1
(10)	『武道伝来記』	1
(10)	『胸算用』	1
(10)	『懐親』	1
(10)	『俗つれづれ』	1
(10)	『文反古』	1
(10)	〈敗毒散〉	1
計		42

Ⅳ<子息氣質剽窃一覧>

順位	作品名	回数
(1)	『二十不孝』	12 ⁽⁴⁾
(2)	〈敗毒散〉	8
(3)	『織留』	7
(4)	『永代蔵』	6
(5)	『新可笑記』	3
(6)	『二代男』	2
(6)	『好色盛衰記』	2
(6)	〈・夜舟〉	2
(9)	『五人女』	1
(9)	『懐親』	1
(9)	『嵐無常』	1
(9)	『胸算用』	1
(9)	『置土産』	1
(9)	『俗つれづれ』	1
(9)	『名残の友』	1
(9)	〈智恵鑑〉	1
(9)	〈御前義経記〉	1
計		50

たのではないかと考えられるのである。

以上の如く、息子を擁してはじめた江嶋屋が失敗し、八文字屋に吸収されることとが決定的となり（江嶋屋の解散は享保八年）、実業家として、息子の後見人として

其頃の失格ぶりが明確となった、そんな時期に『親仁形氣』は書かれた。そして、翌享保五年正月に出されるのである。

体裁は横本で、五巻五冊。実丁数は一三丁から一六丁。この丁数は『子息氣質』（大本五冊。一丁から一六丁）より多く、『娘容氣』（大本六冊。二四丁から三二丁）より少ない。ただ、横本ということもあり、『子息氣質』と、ほぼ同じ長さと考えてよいだろう。

ⅠからⅧまでの表から帰納できる『親仁形氣』の方法的特質は、次の四つになる。

(一) 〈ブレテクト〉の存在が曖昧で、使用頻度の極端に多いテキストが見えない。

(二) 剽窃量が少ない。

(三) 描写よりは、構想を借ることが多い。

(四) 其頃の他の著作と重複する構想が多い。

(一)については、従来『子息氣質』↓『二十不孝』／『娘容氣』↓『五人女』／『和漢遊女容氣』↓『国性爺合戦』↓『好色一代男』および『色里三所世帯』／という具合に、使用頻度の高い〈ブレテクト〉がそれぞれに存在していた。それが『親仁形氣』にはないのである。なるほど、『二十不孝』や『一代女』に拠る部分は比較的多い。しかし、それでも確実に剽窃を言えるのは四例である。さらに、その四つを微細に見ると、次頁に示す如く描写に使ったり、既に利用したものを再度使用するといった例が多いのである。

そんな中で、『西鶴名残の友』や『好色盛衰記』・『西鶴俗つれづれ』といった『親仁形氣』の〈ブレテクト〉になりそうな作品が、かなり長文で利用されていることに注目したい。先述の巻三の三に『俗つれづれ』が枠を提供していたことでも分る如く、それらの作品が其頃に『親仁』の構想を喚起したとも考えられるだろう。だから、そういった意味では『親仁形氣』に〈ブレテクト〉がないわけではない。しかし、彼はそれを出来る限り沈めたのである。

同一部分使用の例

『二十不孝』			
巻五の三	巻三の二	巻一の二	巻名
相撲好きの性ない 人公がつけ 人寄せ	堺の描写	京都の写 京描	内容
※『親仁形氣』(巻一の二)で使用 ※『野傾旅葛籠』(巻三の三)『子息』(巻二の三)で既使用	54字	120字	字数
	※『親仁形氣』(巻三の二)で使用 ※なお『堺の描写』は『野色盛衰記』にもあ って、同部分を其積は『親仁』(巻三の二) の他『娘』(巻四の二)でも使っている		使用している其積の主な作品名

※字数は『親仁形氣』のもの。

ず、もつと発想の根源に遡って成されているということである。つまり、西鶴の喚起力によって紡ぎ出されたものを、そのままの形ではなく自己の主題として造型化、形象化していこうという姿勢が見られるということだ。

西鶴は感情の塊を、あまり論理化・形象化せず、なまのままで読者に投げつける。それゆえ、解釈をゆだねられた読者は、それを思い思いの方法で自らの論理と化していく。それに対して其積は、はっきりと論理化、形象化して読者に提示するのだ。だから、西鶴には余韻があり、其積にはやさしさがある。

確かに、其積の作品はその分だけ、余韻や文学的喚起力に欠けるところがある。それが、一・二節に示した従来の評価にもよく反映している。つまり、彼の作品は論理が明快すぎて、思考の浅さを隠蔽することが出来ないのだ。読者にはわがままなところがあって、さまざまな読みのできる曖昧さや難解さを嫌う反面、多様な読みを許容しない平易な作品を、浅薄・幼稚と貶す。しかし、第三節に示した如く、其積の作品に全く喚起力がないというわけでもないし、先述の如き読みも可能なのである。ただ、私の読みが、巻三の三にのみ通用するものだとしれば、あまり意味がないと思うので、他の部分も読んでみることにする。

(二)は、原文にあたれば自明である。(三)四については、次節で、もつと具体的に見ることにする。

以上の(一)(二)(三)四から言える『親仁形氣』の方法的特質は、其積の西鶴受容が、具体的な表現を借用することにとどまら

五

○〈巻一の二〉 法体しても男伊達氣質が止まず、力自慢をし、神事相撲で投げられて、死ぬ親仁の話である。

周知の如く、これは『本朝二十不孝』(巻五の三)を下敷きとしており、其積は既に『子息氣質』(巻二の三)でこの話を使っていた。三つを比較してみよう。

△二十不孝(巻五の三)

①富裕な両替屋の息子(才兵衛)は、町人ながら相撲好き。②両親は怪我の心配のない遊里や芝居に狂うよう仕向けるが、才兵衛はきかない。③彼は嫁を娶るが、力が落ちると言って一度も枕を交さない。④ますます修業に励んだ才兵衛は、夜宮相撲で投げられ、不自由な体となり、親に大小便の世話させて暮らす。

『二十不孝』(巻五の三)は、不孝咄というテーマに向ってぐいぐい書いていくのであるが、『子息氣質』(巻二の三)はどうか。まず、最大の違いは息子が三人兄弟として設定され、それぞれがその悪癖や悪趣味のため勘当されるという〈趣向〉を用いていることだ。次男の相撲氣質は、その悪趣味の一つとして描かれているのである。話の進行は、①②③がほぼ同じ。ただ、④に至る前に勘当され、主人公は下鳥羽の車使いとなって暮らすというように改変されている。そして、そこを「親に小脇を取られ」「つき出され」という具合に、相撲づくしの戯文で締め括るのである。つまり、『二十不孝』(巻五の三)の緊張を柔らげ、物語性と笑いを付加したのが『子息氣質』(巻二の三)ということになるだろう。

これに対して、『親仁形氣』(巻一の二)の場合、『子息』の如く焦点を拡散させず、専ら親仁の「相撲好き」という悪趣味を追う。③の「嫁」を「妾」にし、④の結末を親仁が洒落のめして死んで行くことにするなど、部分的な改変はあっても、ともかく『二十不孝』と同じ構成をとっているのである。ただ、④の夜宮相撲に出場する動機が違う。つまり『二十不孝』(巻五の三)がそれについて何の言及も

していないのに対し、『親仁形氣』(巻二の一)は、そう成るに至った動機と経緯を詳しく書き込んでいくのである。それによると、親仁を増長させたのは、息子と老妻とが「けがのないやうに、相手の久七に負けてくるやうにと、給分増して内証にて頼」んだため、ということになる。つまり、老人をあまりにも老人扱いしたことが、仇になったというのだ。周囲の老婆心が仇となるといった例は、菊池寛の『忠直卿行状記』の例を挙げるまでもなく、日常的によくあることである。其積はここで、「老人偏したる気質」(『江戸文学辞典』)よりは、むしろ、老人を老人としか見ないような周囲の人々の精神の硬直性を鋭く衝いたのであった。

ところで、息子にあれほど嫌われた親仁であるが、どこか憎めないものがあるのは何故だろうか。それは、彼がひたむきに生きていたからである。彼は「入黒子」をして結婚式に臨もうとする。なぜか。それは歴々である嫁親に、「手前のせがれをにはか分限と見侮らせまいため」(巻二の一)なのだ。彼は嫁方に招待された際、甚盤を片手で挙げ損って怪我をする。また、一人相撲をして皿を踏み碎き、座を滅茶苦茶にしてしまう。なぜか。彼は相手の饗応に対する感謝の意を、何とかして表現したかったからである。ともかく一生懸命なのだ。だが、生来の不器用さが、結果をすべて悪い方へと導いてしまった。本当に生きることの下手な親仁であった。しかし、取りすまして器用な世渡りをする息子と比べ、どれほど人間的事であることか。

この親仁の原型をどこかで見たことはなかっただろうか。そう、これも西鶴である。遊女に入れこみ、息子から逆勘当を受けながらも、息子が絶倫の嫁を娶れば早死にするだろうし、そうしたら遺産を丸どりにして、三浦の花むらさきに会おうと、息子の死を神に願った、『置土産』(巻三の二)に出る、あのしたたかな、それでいて、魅力的だった親仁である。そういうえは西鶴は、そこにこう書いていた。

何の古文しんほう。されば人間死ぬるといふ道具おとし。是に勝男達もなし。すこしのうちも浮世の隙さへあらば。此美君を詠めまいらせ長命丸という薬なり。他家の不老不死の妙薬取にやるまでもなし。近道に是程よい事をしらざるや。

と。前に巻三の三の老人たちの造型は、世之介に負っていると書いたが、『置土産』の親仁の喚起力も見逃すことが出来ない。ともかく、商業資本の盲者となり、生き乍ら死んでいるような息子と一生懸命生きながらも、時流に合わず「お荷物」扱いされる、人間臭い親仁。そんな対立の図式が、ここの基本的構造を形造っているのである。

○〈巻三の二〉ここに描かれた親仁も同類だ。倒産寸前の糸屋は、息子の才覚によって救われる。しかし、彼は隠居屋敷に落ちついて居られる性格ではなかったで、店で指揮をとろうとする。が、衰しいことに、それは、「当世にあはぬ商ひの指図、邪魔にはなれど店のためにはひとつもならず」と迷惑がられ、スボイルされてしまうのである。しかし、「毛虫よ」と若い人たちに毛嫌いされることこそが、正に「年寄の身にしては迷惑なる事」なのだ。なんとか人々と関わっていたと考えた彼は、反乱を企て、「わがままを振舞ひ」、糸繰り女をことごとく孕ませた後、異見する一門衆に向って、「究竟の女房」を自分に世話しろと広言するのである。

○〈巻三の三〉の親仁も、茶屋をしている息子に寄食している。彼は侍奉公をしていた時の癖が治らず、浮気大臣が息子の嫁に戯れるのを突き飛ばし、商売の邪魔をし、息子の追従軽薄を戒め「媚び諂ふ事は無用にせい」などと言って、息子夫婦を嘆かせる。なるほど、息子の言う如く「茶屋にあのごとくの堅いわろをおくは、酒屋に人かみ犬を飼うておくと同じ」かも知れない。しかし、人の親としたら、嫁の一大事を放ってはおけないというのも当然な感情なのである。ともかく、ひたむきなのだ。ただ衰しいことに、時流や息子の世代との回路が合わないだけなのである。

○〈巻三の三〉親仁の悪癖は、それを諫める立場の町役人にも蔓延している。そんな中でも宿老脇のそれは、群を抜いていた。内儀の話すところによれば、こうである。つまり彼は、息子が実業家の立場から、「商人はそれ値をいうて、利を取らずして、何をもつて今日を送るものぞ。商ひの邪魔」というのに対し、「商ひをするとも、みぢんうそをつかず、一銭にても取る事」なかれと反論し、息子

の商い口を「妄語戒」に背くと戒め、息子の稼ぎを、すべて仏のことに使ってしまうのだ。彼は価値観の違いなど一切頓着せず、平然としている。是非はともかく、信仰にひた向きなのである。

○〈巻五の一・二〉に出る親仁も、信仰にひたむきなあまり、息子と衝突している。すなわち「堅法華」である彼は江戸で成功した長男に引きとられ、兩替屋への使いを頼まれる。親仁は、役立つ時が来たと勇み立って出て行った。ところが、相手が浄土宗であるため喧嘩となり、金を借りずに帰って来てしまうのだ。息子が「商人は手回しひとつにて、利を得るものなるに」、「役にも立たぬ宗旨せんさく」と批判しても、「宗旨ゆゑの滅望、本望の至りなり」と言い、「浄土宗の兩替で金は借らせぬ。ぜひに借らうと思はば、われを殺してその上に借用せい」と言って、息子を困らせるのである。

大袈裟に言うなら、ここには金の盲者として非人間的に生き、成功する息子と、人間臭が強く、感情を抑制しないがゆえに失敗する親仁の対立という図式がある。其儘は、その失敗者に論理を与え、商業資本主義社会の成功者に論争を挑ませているのである。失敗者の論理は、えてして「ひかれ者の小唄」になりがちであるが、『親仁形氣』の主人公たちは自らの論理に自信を持ち、平然としているのである。

子供と対立してまで、自己の信念や生き方を強固に貫く親仁たち。その一方で、子供に自己の生を憑依させ、そのエネルギーによって生きる親仁もいる。

○〈巻三の一〉には、「親馬鹿」の親仁が描かれる。つまり、この親仁は、「子をはめるは、たはけのうちなり」という口の先から、わが子の槍踊りを自慢し、棕櫚帯を持って踊らせるのである。先型は『織留』（巻六の二）にあるが、其儘も『子息氣質』（巻一の二）に於てこう書いていた。

今時の親心（中略）余所の子の五歳にて大学読は耳にいらす。我子の十一に成て茶碗たゝいて哥さいもんのまねするを。「あのゆるふしの所の思ひ入をきいて下され」と。客のあるたびにかたらせて悦びぬ

と。「子ゆゑの闇」（巻三の一）という。子供への盲愛、これは親なら誰しもが持ちがちな煩惱なのである。其儘はそのような親の性向を、ここに形象化してみせたのだ。

○〈巻四の二〉 子自慢の至極は、娘を誰にも渡そうとせず、共に滅びる親仁である。そのヒントは、長谷川強氏が指摘する如く（先掲の表参照）、『二十不孝』（巻一の三）にあったのかも知れないが、出来たものは全く違う。なぜなら、『二十不孝』が単に嫁ぎ先に腰の落ちつかぬ娘を描き、その巻き添えとなった家族の没落を描いたのに対し、こちらは「世界にないものを人手に渡さうと」しない親仁の信念が中心となっており、彼はそれを貫き通すし、その境涯は「花嫁の父」になりたくないという煩惱の対価として当然覚悟していた極めて自覚的な婦結であつたからである。それにしても、娘の後を甲斐甲斐しく付いて廻り、人が娘を美人と褒めるのを至上の喜びとし、自分がその父親だということを人々知らせようと懸命になっている様子は、いかにも無邪気で生々としているではないか。金銭的な成功とは比較にならないほどの至福がそこにある。

鮮烈な生は、現役として商売に従っている者になら、誰にでも獲得できるのか。いや、必ずしもそうではない。むしろ、彼らに向ける其儘の眼は厳しい。

○〈巻二の一〉の親仁の場合は、まだいい。大名貸を天職と信じ、「ただ利銀取る事を、世の色人の傾城狂ひするほどに、おもしろく思ひ込」んでいたからだ。つまり、彼は、旅役者の借金依頼に対し前利息、前利息と算盤を置いてみると思息がかさみ、貸す前から逆に利息を預からなくてはなりません、などといって、全く平然としていられるし、「算盤が物を申す」ということに一念の疑いも挿まず生きているのである。

○〈巻三の二〉に出る吝嗇な親父は、「物の本」を見て、仙人は金がかからなくて良いなどと憧れる。巻二の一は『子息氣質』（巻三の二）に類話があつたが、こちらも『子息氣質』（巻三の一）に似た話がある。その子息は、ムードで歌人に憧れ、詐欺に遭っていた。信念に基づかない変心は弱い。こちらの親仁は「目の

鞘の抜けたる、油断のならぬ男」に付け込まれ、インチキの仙書を百両も出して買ってしまう。そして空を飛べると錯覚し、墜落するのだ。ここで其磧は『名残の友』（巻三の三）を巧く利用し、利に基づく仙人願望が商業資本（？）に詐欺という形で逆利用され、「転落」するさまを描いたのである。

○〈巻四の一〉の老人たちも同じ構造を持っている。長生の薬を欲しいというのは、誰しもが持つ煩悩だ。しかし、この親仁たちがそれを欲した動機は少し違っている。つまり、彼らは「命の入日傾く老体ども、後世の事は忘れ、ただ利銀の重なり、富貴になるを樂し」み、貸金の取り立て前に死んでは困るという、極めて実利的な目的で寿命薬を欲しがったのだ。それゆえままと「仕掛」けに遭って、ニセの寿命薬をつかまされるのである。

○〈巻四の三〉 仕掛けに遭うという点では、この親仁も同じである。彼は『子息気質』（巻一の二）の主人公に似て、「商売人といふものは、表裏をもって世を渡り、ことに平生の行儀ひだらく」と嫌い、武士気質でいる。しかし『子息』の主人公は仕官に成功したのに対し、この親仁は金に目が眩み転落する。つまり、彼は柄に合わない商売気を出し、借金を取りに出かけたが、「仕掛け」にはまり、女に誘惑され「綿のやうに」なってしまうのである。

欲心から仙人を願ひ、長寿薬を欲し、借金の皆済を迫った主人公たちは、ことごとく詐欺に遭っている。こんなところに、其磧の「現役実業家」への皮肉な眼が見られないだろうか。

○〈巻五の三〉 其磧は、右の話（巻四の三）で『一代女』（巻四の二）のストーリーを巧妙に利用し、親仁を転落させた。ここでは、『武道伝来記』（巻一の一）を使って、醜女の成功譚を描く。醜女の成功譚は其磧のよくするところであるが（『娘容気』巻三の二など）、ここでは、娘の成功によって成り上った親仁の、一風変わった行状について書いている。つまり、親仁は成り上った後も「木綿の裕」を着て「茶碗酒」を飲み、庭の荒庭に寝る。そして、周囲の制止をも聞かず、「千本突き」を何よりも楽しんで暮らしたのである。

親と子の対立は、ここではじめて調和を得る。ここで象徴的なのは、その子が商業資本の中し子的な商家の男子ではなく、武家に嫁した娘だったということである。いかにも、親は子に歩み寄った。しかし、商業資本の体現者としての子に歩み寄ったのではなかったのだ。さらにこの親仁は、娘の家に世話になりながらも、ついに自分の性癖を崩さなかった。この暗喩の意味するものは思いのほか深い。なぜなら、こんなところに社会に妥協しなくては生きていけないというところが、分り過ぎるほど分っていないが、十全にそれができない其磧の意地を見るような気がするからである。

社会に妥協しない姿勢それは老人たちが、御異見役として割り込んだ「題目講中の説教」（巻一の一）（巻二の二）や「旦那寺の和尚の説教」（巻二の二）（巻四の三）を、ことごとく拒否する点に顕現されている。なぜなら、それこそ社会的常識（＝権威）の象徴であったからだ。

ひたむきに努力しながらも、時流に合わず成功を得ることの出来ない親仁。失敗をし、転落して、周囲からはスポイルされても、なお絶望することなく、隠遁もせずしてウィウィッドに生きる親仁。それこそ正に、実業家としての懸命な努力にも拘らず、成功を克ち得ることの出来なかった其磧の哀しき自画像なのだ。弥次・喜多の例を挙げるまでもなく、失敗者はいつもおしい。既に見た如く『親仁形氣』には、「老人の悲哀」（第一節の④）があり、登場人物の「弱点に同情」（同①）する筆致が見られると評されていた。それもその筈、そこに描き出されたのは、戯画化されてはいいても、紛れもない其磧自身の姿だったからである。これより前、其磧は『商人軍配団』（正徳二年）（巻四の一・二）に於て、時の運に乗れず失敗を重ねる不孝な兄と、堅実に世を渡って成功する親孝行な弟とを描出し、両者を見事に描き分けた。中でも、失敗者の兄を優しく見詰める母親の心情をよく書き込んでおり、「よくまとまった佳篇」（長谷川強氏『浮世草子の研究』三四八頁）と評されている。注目したいのは、その母親が、長兄の大気な氣質を責めようとはせず、「死生命あり、冥貴天にあり」（巻四の一）という冒頭の格言に総てを収斂させていたことである。いかにも、母親とはそんなものだと言ってしまう

えば、それまでだ。だが、成功・不成功は、畢竟、天の配剤と達観し、その上で、幸薄い人間を見守り、共感していく姿勢は、そこに原型を求めることが出来るのである。

『親仁形氣』以後、其磧は二度とこのシリーズに手を染めようとはしなかった。なるほど、気質物シリーズは続くし、系統学的には『手代気質』（享保一五年）や『諸商人世帯形氣』（享保二二年）があり、『賢女心化粧』（延享二年）もある。だが、商人出世譚『手代気質』『諸商人世帯形氣』や、当世花嫁気質『賢女心化粧』的性格を有するそれらと『親仁形氣』とは、本質的な点に於て、激しい落差がある。それは、ひとことで言うなら「毒」のことである。つまり、時代を斜めに生きた親仁の生き方は、そのまま硬直しつつある当世社会への「棘」をも孕んでいたのだ。時あたかも、享保。八代將軍吉宗の治下。規範の厳しく求められた時代である。試みに『御触書寛保集成』を開いてみるといい。そこには、夥しい数の禁令が集められている。信賞必罰、孝行者は顕彰され（『有徳院殿御実紀』享保五年八月一日・同一年八月一九日など）、不孝者は容赦なく処刑される（『同』享保三年六月二六日・同九月二六日など）。時代だったのである。一方、享保元年八月には逸速く「女大学」ものの元祖といふべき『女大学宝箱』が出された。因みに、その版元の一人として名を連ねた小川彦九郎は、江戸に於ける其磧作品の有力な売り捌き元でもあった（『享保以後江戸出版書目』）。其磧は、あえてそんな時代に背いた作品、『親仁形氣』を書いたのであった。

其磧の歿年は、享保二〇年（『村瀬家系譜』）とも、元文元年（『其磧置土産』序）ともいわれる。いずれにせよ、享保という時代を生き切った人であることに違いない。彼にとって、享保とは如何なる時代だったのか。それは分らない。ただ晩年は零落したらしい（『白鷺洲』）、決して楽な時代ではなかったということだけは確かだろうだ。

大江健三郎氏は言う、「書き手は、その言葉によって、想像力的なものを喚起する仕掛けをつくりだそうとする」（『文学の方法』八五頁）ものだ。私は『親仁形氣』をあまりにも好意的に読み過ぎたかも知れない。しかし、私のこの「想像

力的なもの」が、『親仁形氣』の喚起力によって成ったということも、まぎれもない事実なのである。

最後に、大江健三郎氏の表現を借りて主題を次の如くまとめておこう。

『親仁形氣』は、自動化（墮性）を迫る社会に対する、老人たちの叛乱であり異（アストロネー）化の申し立てを描いた本である、と。

註

一 暉峻康隆氏の分類によれば、これは「第二のジャンル」で「愛慾の否定的描写」ということになる（『西鶴著作考』『西鶴研究ノート』）。ただ、本文で触れた如くここでは「小さな盆」と「巨大な財産」という対比が考えられるわけで、その意味では「第一のジャンル・飲酒の否定的描写」（暉峻氏）とか「飲酒悲劇物語」（宗政五十緒氏『西鶴の研究』）というような性格を併せ持つとも言えることが出来るだろう。少くとも其磧は、後者にアクトセントをおいて読んでいたような気がする。

二 『京撰戯作者考』『江島其磧』は、「古老の口碑」としてこう書いている。「（誓願寺）の門前に、昔より餅を売る家ありて、大仏餅とて世にもてはやし、繁昌して家巨萬の財主となる。是則江島屋が先祖也。其後豊大閣洛東六波羅の南に方広寺の大仏を建立せらるゝゆへ、又他家の餅屋大仏餅とて、新に店を開きて、繁昌連綿たりしにつき、京極通始めの餅屋は業を転じ、誓願寺通り、柳の馬場へ変宅せしに、其子孫其磧に至りて大に驕奢に長じ、遊里に莫大の財を費し、洒々落々たる風流家にて、数百部の戯作の書を著し、自笑と合作して出し、大に世に賞美せり」。

△付記▽ 本稿の校了後、堤邦彦氏から御玉稿（『世間子息気質』成立の背景―益軒教訓書との関連に及んで―、『藝文研究』四三三号（昭和五七年十二月））の抜刷を頂戴した。拙稿（『世間子息気質』論）批判の立場をとり、『子息気質』の中に、貝原益軒らの手になる通俗教訓書に対する「もどき」を見ていこうとする堤氏の論は極めて刺激的であった。反論も含め、別稿を期したい。